

〔翻刻〕 祐徳稻荷神社中川文庫蔵『雅俊詠草』 附校 異・解題

日高, 愛子
佐賀大学 : 講師

園田, 克利
福岡大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1518335>

出版情報 : 文献探究. 53, pp.13-24, 2015-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

〔翻刻〕 祐徳稻荷神社中川文庫蔵『雅俊詠草』附校異・解題

日高 愛子・園田 克利

一 解題

祐徳稻荷神社中川文庫蔵『雅俊詠草』（6/2・2/249。以下、祐徳本）は、飛鳥井雅俊（二四六二―一五三三）の詠草計一二九首（うち二首は重複）を収録する。縦二〇・四糎×横一八・二糎。袋綴本、一冊。表紙の左肩に「雅俊詠草」と墨書されるが、本文とは別筆に見える。巻頭に遊紙二枚があり、その表に「中川／文庫」の印（方朱印、陽刻）がある。墨付一七丁。一丁目に「直郷／之印」（肥前鹿島藩第六代藩主鍋島直郷（二七一八―一七七〇）、方朱印、陽刻）がある。本文は、直郷の同印と直郷による識語を持つ同文庫蔵「実隆五十首」^{〔注〕}と同筆に見えるが、直郷の筆跡とは異なるようである。奥書に、

于時元禄七戌五月十八日

於洛陽令懇望写之者也

とあり、元禄七年（一六九四）が書写年か。とすれば、祐徳本が書写されたのは、直郷の祖父直條^{〔注〕}（一六五五―一七〇五、肥前鹿島藩第四代藩主）の時代ということになる。

伝本は、雅俊自筆とされる「園草」こと井上宗雄氏蔵本（以下、井上本）のほか、刈谷市中央図書館村上文庫に抄出本（以下、抄出本）の存

在が知られ、夙に井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期（改訂新版）』（明治書院、一九八七年〔初版、一九七二年〕）や米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社、一九七六年）に指摘がある。また、井上本は『新編私家集大成』所収の底本となっている。井上本の概要について『新編私家集大成』の解題を次に引用する。

底本は後世加えたと思われる紙表紙に、恐らく本文同筆と見られる題簽を左上に貼っている。題簽は「園草和哥」。二七・七cm×二〇・七cmの袋綴一冊本。初めに遊紙一丁、その裏右下隅に「園文庫」の朱の陽刻がある。本文墨付は二二丁で、いずれも楮紙で裏打ちしてある。初めの五丁（延徳四・明応二年分）は茶色がかった楮紙で、一面一〇行、一首一行書き。後の一七丁（大永二年分）は上記よりもやや色の薄い楮紙で、一面ほぼ一〇行だが、九行の所、一―一二行に及ぶ所もある。歌は一行書きである。末尾に楮紙一枚を加え、表に寛政元年飛鳥井雅威が識語を加えている。雅威によると自筆本ということになるが、前の五丁と後の一七丁とでは若干筆跡が異なるような感もする。但し前・後は三〇年を隔てているので、年齢の差かもしれない。いずれにしろ雅俊時代の筆である。修補は雅威時代のものかとも思われる。

すべて一五五首を収めるが、延徳四年（一四九二）六月以後（二八首）、明応二年（二首）、以下大永二年分である。冒頭に「延徳四年の六月……」とあるのは、この時から日次詠草を始めたのか、或は別人の筆になるからかは、不明であるが、年末まで至り、続いて翌明応二年の冒頭まであつて、その後は失われたらしく、三〇年を隔てた、晩年の在山口時代の大永二年（一五二二）にとんでいる。この分は、書き直しその他の表記によつて、自筆であろうことが推察される。（井上宗雄）

『新編私家集大成』により井上本を参照するに、冒頭歌は、
延徳四年の六月、姉小路相公すゝめられし歌のなかに、薄

露にたにやすくみたれし花薄　むへも野分の跡の夕暮
であり、以下、

蒲生刑部大輔、年始の会に

鶴有退齡

おのかへんかきりはしらし白鶴の　やとれる松は生かはるとも
という歌まで延徳四年分の二八首と明応二年分の二首の計三〇首が五丁分に収録されるが、祐徳本にはこれが欠落している。

両本についてそれぞれ配列順に歌番号を付し、詞書の年月を参考に構成を示すと、次の如くである。

	【井上本】	【祐徳本】
延徳四年（一四九二）	六月 1 5	×
	七月 6 13	×
	九月 14 26	×
	十二月 27 28	×
明応二年（一四九三）	正月 29 30	×

	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
×	31 40	41 48	49 63	70 95	96 109	110 122	123 143	144 155
126 129	1 10	11 18	25 39	40 65	66 79	80 92	93 113	114 125

右に述べた巻頭の違いのほか、両本で異なるのは大永二年二月分の配列である。詞書から詠草月日を見てみると、祐徳本では「二月十一日」、「同廿日」、「同当座三十首」、「二月廿八日」、「同当座三十首」の後、日次順に整理されている。だが、井上本では「同当座三十首」の後、「三月五日」以下三月分の歌が配され、五行分空白にして丁を改め、「二月廿八日」、「同当座三十首統歌」の二月分の歌が収録されている。『新編私家集大成』で確認するに、井上本は「三月五日」の前に「二月廿八日」及び「同当座三十首統歌」の二月分の歌を挿入する書入れがある。井上氏の述べるようにこの大永二年分が雅俊自筆だとするならば、「二月廿八日」以下の二月分の歌は雅俊が自ら後に補足したものか。一方の祐徳本は井上本の歌順を改め、二月分も全て日付順に収録し直している。また、井上本では「嶺雪」「沢水鳥」の歌順で「嶺雪」の前に「沢水鳥」の歌を挿入する書入れがあるところも、祐徳本では「沢水鳥」(55)「嶺雪」(56)と改められている。こうした歌順の整理だけでなく、例えば井上本では、

元日詠松久友和歌 正二位雅俊

小松よりみしも木高き □なれば 今行末も契らさらめや (31)
とあるのに対し、祐徳本では、

元日、詠松久友和哥

小松よりみしも木高き陰なれば 今行末も契らさらめや (1)
とあるように、祐徳本は井上本の修正を反映した本文となつてい
る。故に井上氏は、井上本の「かなり忠実な転写本」が祐徳本だ
としてい

但し、祐徳本の末尾には井上本に未収録の次の二首が見られる。

尺教

えにしありてくみや分らん法の水 ひとつなかれのすゑをあまた
に

鹿

あはれとも聞ぬ物ゆへさをしかの ねにたてそめし秋もかひなし
更に丁を改め右の二首が重複して記されるのだが、「尺教」の題の肩
に「或本『書入』」、「鹿」の題に「同」と書き付けられるのによつて、
別本によりこれを付加したと推される。

一方、抄出本は『梅処漫筆』二六に所収され、大永二年分のうち四
二首を抄録する。卷末に、

此一卷不覚後之写畢

于時文政三年庚辰十二月十五日

とあるのによつて文政三年(一八二〇)写であることが知られる。祐
徳本の歌番号によつて抄出本の構成を示すと、次の通りである(歌題に
記号が付されるものは△題、歌に記号が付されるものは△の如く示した)。

- 1 2 △ 3 10 ○ 11 15 16 17 18 26 31 △題 32 △ 34 △

- 37 △ 38 △題 39 41 △ 45 △ 48 50 54 △ 62 ○ 65 66 67 ○
- 68 69 82 △ 86 87 △ 90 91 △題 92 98 99 100 105 △題 107
- 115 △ 119 121 125

歌自体には大きな異同は殆ど見受けられないが、

織出すにしきにも猶に猶ま萩原 句をそへて秋風そ吹(萩如錦)

との異文注記が一箇所認められる。また、井上本や祐徳本では「五
月廿日、左京兆月次会に／早苗」とあるところを「早苗」と記すなど、
抄出本は詠草月日や歌会に関する記述を省き、歌題のみを記す傾向に
ある。

さて、井上氏が「かなり忠実な転写本」と指摘した祐徳本であるが、
具に照合してみると井上本と若干の相違があり、どちらかといえれば祐
徳本は抄出本と一致する。よつてここに改めて祐徳本を翻刻紹介する
次第である。

最後に、祐徳本から確認し得る人物について些か触れておきたい。
詠草中最もよく見られるのが「左京兆」こと大内義興(一四七七—一五
二九)の名である。米原氏は、義興の時代における歌会の盛行を踏まえ、
次のように述べている。(注)

義興はこのようにして歌道に無関心であつたわけではないので、
大内歌道史上における義興の地位を低くみることはできない。少
くとも大内歌道の伝統線上にあつたと見做してよろしいであろう。

雅俊は永正十七年三月十六日に義興を頼り、周防へ下向している(『公
卿補任』『二水記』)。『実隆公記』『再昌草』にも次のようにある。

三月十三日、辛丑、晴、…飛鳥井前大納言、可下向周防国、為暇請
来云々、不謁、無念也、(『実隆公記』永正十七年三月十三日条)

三月十五日、飛鳥井前大納言、田舎にまかりくたるよし申侍

しかは、花の枝にさして

なへて世の春さへつらし行人を とゝめぬ花の都と思へは

返事

言葉の花のみやこをわかれ行 春のつらさのなくさめにして

(『再昌草』永正十七年、三七七・三七七、新編私家集大成)

『和歌文学大辞典』「園草」項(山本啓介氏解説)にも、

当時の公武の交流と動向が知られることに加えて、大永二年の作は大内義興を頼つて山口に下向した時のものであり、地方歌壇の様相を知る資料ともなる。歌風は縁語などを巧みに配する二条風の平明温雅なものであるが、大永二年の作には異郷で老年を過ごす述懐の思いが看取できるものもある。

と指摘されるように、祐徳本に収録される大永二年分の詠草は雅俊が周防へ下つた後のものであり、義興を中心とする大内文化圏とその活動の様子が窺い知れる。

47 番歌に見られる「内藤内蔵助護道」は大内被官の内藤護道(生没年未詳)である。肖柏の『春夢草』に、

護道、内藤内蔵助、つくしより連歌をみせ待し時、つゝみ紙に住よしの松の落はにかきそへよ つくしの海のもくつ成共

(『春夢草』下、雑歌下、二〇〇七、新編私家集大成)

とあるように、護道は連歌人として肖柏や宗祇らとの交流が知られる(注3)。(「明応五年六月七日護道宗祇等何人百韻」等)。他にも、

周防国にて護道よませ侍し五首歌に、秋朝

あさな□□露さむくなる日の影に 命かけたる虫のあはれさ

(『下つふさ集』秋歌上、二九九、新編私家集大成)

の如く護道の名が確認される。

66 番歌の「興勝」は野間興勝とされるが、義興の家臣弘中興勝(生没年未詳)か。永正六年(一五〇九)三月十七日に京都で飛鳥井家と大内

被官によつて行われたとされる「詠三首和歌」(神宮文庫蔵「永正和歌」、彰考館蔵「二会和歌纂」)にも「興勝」の名が見えるが、同年雅俊は弘中

興勝へ歌会作法など一〇箇条を記した「和歌条々」を伝授している(注5)。

98 番歌に見える「吉見源六」については未詳。義興の家臣である吉見頼興(一四六〇—一五三二)か。今後の解明が俟たれる。

注

注1 外題には「飛鳥井雅俊卿五十首和歌」とあるが、誤り。これについては別稿を留意している。

注2 米原正義『戦国武士と文芸の研究』六四八頁。

注3 注2第五章第三節「その他の被官人」六九八・七〇三頁。

注4 注2六四八頁。

注5 注2六七三・六七九頁に神宮文庫蔵「永正和歌」による翻刻がある。

注6 山本啓介『詠歌としての和歌』(新典社、二〇〇九年)、同「飛鳥井流和歌会作法書『和歌条々』について」(『国語国文』78、二〇〇九年一月)、同「飛鳥井家の和歌会作法伝授―『和歌条々』を中心に」(『和歌文学研究』100、二〇一〇年六月)。

(日高)

〔凡例〕

- ・底本は祐徳稻荷神社中川文庫蔵『雅俊詠草』を用いた。
- ・歌番号を付し、抄出本の抄録歌は〔〕の如く記した。
- ・改丁を「(1才)の如く示した。
- ・漢字の旧字体は現行の字体に改めた。
- ・見消ちは||で示した。
- ・井上本と抄出本(マイクロ複写による)の校異(漢字・かなの相違を除く)を末尾に記した。

※1 雅俊詠草 「(表紙)

(遊紙(下))

※2

大永二年正月

元日、詠松久友和歌 ※3

[1] 小松よりみしも木高き陰なれば 今行末も契らさらめや

正月廿日、大内左京兆月次会始

梅久薫

[2] もろこしや梅咲嶺も此宿の 世々をこめたる香にはをよはし

同当座三十首続歌に

子日

[3] 春かすみ引手もゆらく玉松の はつねに千世の色やみゆらん(1才)

不逢恋

4 思ふともよしやしらせしなひかすは いとふ心もさそなくるしき

述懐

5 今は身に何をかまたん春日野や おとろの道も分つくしきて

同廿八日、此亭月次会始

鶴有遐齡

6 送りきて霜をかさぬる老のつるも 千世ののこりは猶そはるけき

同当座、立春

7 けふといへは先あらたまる言の葉の 花にひらけて春はきにけり

苗代(1ウ)

8 ますらおか心のたねもしめのうちに あらはれそむる小田の苗代

見恋

9 おもかけはまきれぬ物をはなかたみ めならふ人の中そくるしき

暁

[10] 老ぬれば夜ふかき空にね覚して 明かたにのみ夢みえける

二月十一日、氷上法楽とて杉彦七隆重百首歌勸進し侍しに、巻

頭一首読侍りし

立春

[11] かすむとはまたしら雪のみねたかみ 出る日かけに春や立らん(2

才)

同廿日、左京兆月次会に

朝鶯

12 花ならぬ心やさそふ朝ほらけ かすむ梢の鶯の声

野春雨

13 かきりなきめくみの色もむさしの、 草はみなから春雨そふる

増恋

14 色かはる袖のま萩をみやきのゝ 木の下露にはらひ侘つゝ

同当座三十首に

はなさくら

[15] くれぬともなかめはすてし花桜 一さかりなる春の木かけを(2ウ)

いひはしむ

[16] はつ時雨はやもる山のことはに いかなる色をそめてふかめん

ふみたかへ

[17] はま千とりおもはぬかたの夕波に よりにし跡もとめぬ悲しさ

つる

[18] 雲井よりおりぬる庭の友つるに やとの千年はさしてしるしも

二月廿八日、此亭月次三首歌に

山春曙

19 立つゝくかすみをかけて山かつら わかるともなき曙のそら(3オ)

野春草

20 打なひきこまこそなるれ野へはまた はつかにもゆる草のわか葉に

春待恋

21 こし路には待みんかりの玉つさも なか空にのみなかめ侘つゝ

同当座三十首統歌に

浦霞

22 たこのうらやおきつ波路はほのかにて たゝぬ日もなき春霞哉

落花

23 老らくの道もわすれてちる花に おもひわひてもくらす陰哉

恋船(3ウ)

24 心からうき身よいかになるとふね さしてよるへもしらぬ思ひに

(二行分空白)

三月五日、法泉寺の花を左京兆など見侍て、三十首統歌侍に

風静見花

25 なへて世の春風よりもおさまれる 花の所をのとかにやみん

花前述懐

[26] おもふへき老の歎も忘るゝは 花やうき世の外に咲らん

同廿日、左京兆家の月次三首歌に(4オ)

葛城山

27 春風のさそふは夢かかつらきや 花にかけたる橋のとたえも

伊勢海

28 うらゝなるいせおのあまつかりかねも きよきなきさにかへる波哉

会坂関

29 心猶とむる都やあふ坂の 関しまさしきしるへなりけん

同当座三十首統歌に

早春

30 さほ姫もかすみの衣立なれぬ 袖さむからし春の初風

恋寺(4ウ)

[31] うき契たのみても又いかゝせん 我身はつせのよその夕昏

恋車

[32] めくりくる月日はあれとむな車 わかれしまゝの床そふりゆく

同廿八日、此亭月次三首歌に

落花

33 ちる花をねにかへさしと春風の さそふ空をはいかゝうらみん

苗代

[34] せきかへる御たらし河の十代には 水をもたねも神にまかせん

樵夫

35 たのしひは木こりのみちの憂ふしの 中にも有とうたふかへるさ
(5才)

同当座三十首続歌に

霞

36 あさまたき霞の衣たちしより とを山すりの色やみゆらん

山

[37] 老か身にねかひもなしやくらゐ山 代々の跡をはのほりつくして

馬

[38] おしめ人我身にしれは徒に ひまゆくこまの過しくやしき

鏡

[39] わたしこし百済の人も七この かゝみにみかく心見えつゝ」(5ウ)

四月廿日、左京兆月次三首に

卯花蔵路

40 雪にたにふむ跡とめしこし路なる 卯花山を分やまよはん

漸待郭公

[41] 村雨の雲のみたれを五月そと 空おほれしてなけ時鳥

寄懸樋恋

42 をとたえぬかけひの竹のうきふしは もりても水に袖ぬらしつゝ

同当座卅首続歌に

山新樹

43 折しらぬ花や紅葉のときは山 しけるを木々の盛とそみる」(6才)

逢夢恋

44 はかなくもかけし契よ衣／＼は さむるうつゝの夢のうきはし

松歴年

[45] いやつきの千々の年をも砌なる こもたる松のかけにならへて

(六行分空白)」(6ウ)

四月廿五日、善福勸進氷上法楽百首、巻頭一首也

立春

46 明そめし神代の天も久かたの 日影を今に春はきにけり

今目

遷子

曉立春

47 天の戸のあくるもまたてなく鳥の 初音に春やかすみきぬらん

島花

[48] 淡路かたかすみそ白き行舟の 島かくれにも花や咲らん」(7才)

遠郭公

49 とはゝやなそことはかりの時鳥 遠方人はさたかなるらし

旅夕立

[50] いかにしてこよひはほさん旅衣 日も夕たちに袖しほりつゝ

萩風

51 うへをきし我そ待とる萩の葉に またはつかなる秋風の声

外山鹿

52 おくふかきをのかおもひをつくしきて 外山に出るさをしかの声

関月

53 清見かた波と月との有明は 心そ関の戸さしとはなる」(7ウ)

瀧紅葉

[54] 山風のさそひておつる紅葉ゝに しろきすちなき瀧の糸哉

沢水鳥

55 あしかものうきねの波やこほるらん あさ沢水にをときはく也

嶺雪

56 うつもれしあらしの後は下折の 雪のこゑきくみねの松原

切恋

57 ことほりもしらてそまとふ身のために 身にかへてなと思ふ心そ

寄衣恋

58 心にはさすかかけし墨染の ころも過にし老そあやなき」(8才)

(四行分空白)

廿八日、此亭月次会に

竹亭夏来

59 うつしをく竹のさ枝の千尋にも 夏はかくれぬ陰のすゝしき

人伝郭公

60 わりなしや身にうとまれしかりし歟初音にも 人をうらやむほとゝきす哉

疑真偽恋」(8ウ)

61 たのめしを猶あやふむや人よりも 我からつらき恋路なるらん

同当座、新樹風

[62] しけりゆく梢は風のをともせて 古葉ちるなり松の下道

恋暁

63 とひし夜もむなしき床もおもひせく 涙やかきり有明の空

懐旧涙

64 いにしへはしのふもうさもおもひ出て おなし涙そ袖に隙なき

(三行分空白)」(9才)

四月つこもり比に、左京兆より藤のさかりなる枝を送られしに、

歌をよみてまいらすへきよし、使申侍しかは

[65] 春の色をあせぬのみかは藤かつら 長きためしもやとにかけきや

五月五日に、興勝使にきたり侍しに、よみてつかはしける

[66] 契さへふかきねさしかあやめ草 むすふ枕のとしをかさねて

(三行分空白)」(9ウ)

五月廿日、左京兆月次会に

早苗

[67] なか岡やおちほひるひし田つらにも 又おり立てさなへとるなり

桜雨

[68] 五月雨は川水にこり雲とちて いつくをすめる天としもみん

樵夫

[69] つみに身は人のもときをおひそへて 六十年のさかをこゆるくるし

同当座

春

70 なをさりに心やつけん花鳥の 色にも音にもあけほのゝ空」(10才)

冬

71 瀧波はむせふ氷にくたけても ちるは岩ねの玉あられ哉

雑

72 いつまでかきゝてもおなし暁の かねにうき世の夢をのこさん

同廿八日、此亭月次会

高

73 見るかうちにおもかけかへて雲にきえ 雲にうかへるみねの松原

迷

74 何わさかおもひよとめん世中は よしのゝ川の水のゆくゑに

旧」(10ウ)

75 代々かけてひろひし玉をしのふにも わかのうらみにぬるゝ袖哉

同当座

夏日

76 山のはにあさくもりして照すへき 日かけもしるき六月のそら

夏恋

77 かひなしやうらみ^もはて^{ぬ敷}す我中は うつせみのはのうすき契に

夏庭

78 月もかなさらぬ夕も庭に出て 立やすらへはあかぬすゝしさ

夏旅

79 朝立て夏野をゆけは草ふかみ 鹿ふみおこしわれそおとろく(12才)

六月、此亭月次三首会

夕立過

80 時のまのならひしなくはにはたつみ 猶いかはかり夕立の跡

荒和祓

81 みそきしてけふはあらふる神たにも なこしの川へ心すゝしも

寄柚恋

[82] たのめてはくれ待物をあやにくに 日高の柚のかけをしそ思ふ

同当座

夏草露滋

83 秋近き野もせの草にみたるなり 花待露も所せきまで(12才)

寄木別恋

84 根にかへる契ありともいかゝせん 山桜戸のきぬくの空

山家人稀

85 問とはぬ心そ岩木をのつから すむとはかりの庵は見ゆとも

同廿日、左京兆月次三首に

蛩

[86] ふりはてし御船は波のほり江にも ^{玉敷}しくはかりとふほたる哉

泉

[87] あかすみて岩井の水の流にも 枕しつへき夕すゝみ哉

思(13才)

88 とへかしなむくらのやとのおきふしも たえぬ思ひにさしこもる身

を

同当座に

巻頭曙雲

89 有明の月も残れる山のはに わかれかねたるよこ雲の空

枕塵

[90] 枕のみさのみはらはしとしふれは われもつもれる塵のうき身に

獵師

[91] さゝ枕一夜や借ん梓弓 いなのゝ原に狩しくらさは

細引

[92] しつかなる波を時そと海士小舟 細引かけていそく浦々(13才)

七月七日、於左京兆五十首続歌に

七夕月

93 一とせを月のわたりのこよひには さそほしあひの雲のかよひ路

七夕木

94 中たえぬもみちの橋の錦をは いく秋かけてわたしそめけん

田家鹿

95 心なきしつか庵にはをしねもる 田のもの月にさを鹿の声

同会、大夫代に

七夕風

96 秋風もうらめつらしき羽衣に たちやかさねしほしあひの空(13才)

社頭松

97 陰高き宮居も共に老松の かはらぬ色は世々をへぬへし

同十一日、吉見源六法楽とて三十首歌勸侍しに、巻頭を

萩風

[98] けさもまたみとりはおなし萩の葉に 先ほのめかす秋風の声

廿日、大夫殿月次会

萩如錦

[99] 織出すにしきに猶ま萩原 匂をそへて秋風そ吹

遠村霧〔13ウ〕

[100] 立つく雲田の村の秋霧に そこともわかぬ夕昏の色

名所旅

101 波風のとよみとたのむかりふしも いくよへぬらん竹島のかげ

同当座、籬女郎花

102 しめゆひし籬なからに女郎花 たれか思ひの露をかけけん

別恋

103 涙のみむせふ言葉にしはしとも いひもいたさぬ衣々はうし

寄忘草恋

104 たねまきてわれも忘るゝ草ならば さすかに人やあたになすへき

庭合歓〔14オ〕

[105] 暮ゆけは待とる庭の月影に などかはねふのなひくけしきそ

同廿八日、此亭月次三首会に

草花

106 百草はみなからさきてむらさきの 色もやこもるむさしのゝ原

聞虫

[107] 露もさその路の秋風さ夜吹て しのにみたるゝすゝ虫の声

片思

108 おもひ川せかれぬ水のあはれとも とはれぬ身をやあたにしつめん

同当座、早涼室

109 身にしてみて先しる袖や老ならし なへて吹とも秋の初風〔14ウ〕

沢辺鳴

110 聞てしも袂そしほる鳴のなく さはへの水は床ならねども

寄祓麻恋

111 人心ひくてもみえぬ大ぬさに いつをよるせとかけてたのまん

暁遠情

112 ね覚して思ふ心の行衛をは たれにかとはん誰かこたへん

寄灯懐旧

113 消やすき物ともいはしかゝけきて むかしを今の灯のかげ

〔二分空白〕〔15オ〕

八月十五日、此亭月次三首に

貴賤憐月

114 衛士のたく煙もけちて雲の上に 深ゆく月の影そさやけき

月前初雁

[115] さはかりのくまとはならしおほひ羽の 雁は一つら月にみゆとも

寄月神祇

116 男山秋の中のものあらたなる 月にもうつせ宮つくりして

同当座甘首に、秋天象

117 なへて世の秋ともいはし見る人の 心にすめる月の光を

秋動物〔15ウ〕

118 秋ふくるまのゝ入江のうら風に うつらの床も波やうつらん

秋人事

[119] うき秋もしらてや民の草にはに きはふ時を待えかほなる

同廿日、左京兆月次会に

古渡秋夕

120 はし姫の袖いかならんさらたてたに 秋は夕のうちのわたりに

月前擣衣

[121] 秋風にをとすみのほるきぬたをは そらにもきくや月の宮人

寄注連恋

122 堪て身の契そしらぬ神かきに ひくやみしめの心のなかさも〔16才〕

同当座廿首に、萩

123 もる人のおしともよしやいはれのゝ ま萩か花は折てかへらん

鹿

124 霜ふかみさそ草ふしも寒からし いとゝひまなきさをしかの声

山

[125] 住人のたのしむ山の陰そひて 愚なる身立やましらん

※4 尺教

126 えにしありてくみや分らん法の水 ひとつなかれのすゑをあまたに

鹿

127 あはれとも聞ぬ物ゆへさをしかの ねにたてそめし秋もかひなし

〔16ウ〕

尺教

或本ニ書入

128 えにしありてくみや分らん法の水 ひとつなかれのすゑをあまたに

鹿

同

129 あはれとも聞ぬ物ゆへさをしかの ねそたてそめし秋もかひなし

〔四行分空白〕〔17才〕

〔八行分空白〕

※5 于時元禄七戌五月十八日

於洛陽令懇望写之者也〔17ウ〕

〔遊紙一丁〕

〔校異〕 数字は歌番号、〔井〕井上本 〔抄〕抄出本、*は記述ナシを示す。

※1 雅俊詠草—雅俊卿詠草 抄卷【抄】

※2 *—1〜30 【井】

※3 *—正二位雅俊【井】私云巻頭也【抄】

1 陰—□^除【井】

2 香—香^香【井】

3 続歌に—*【抄】

10 にのみ—に—【井】夢—夢^そ【井】夢は【抄】

11 十一日—十日【抄】日かけ—日かけ^{日かけ}【抄】

15 三十首—*【抄】とも—とて【抄】—山【井】

19 24—64 69〔歌配列〕【井】

21 玉つさも—玉つさ^もを【井】

23 陰—頃【井】

26 三首歌に—○に【井】

27 かつらきや—かつらき^や【井】

28 に—を【井】

32 床—庭【井】

34 かへる—かくる【井】

37 身—世^身【井】

46 一首—首【井】内藤—内府【井】護道—護道^{御本}【井】

- 50 しほりしほれ【抄】
- 53 有明はー有明□【井】
- 54 さそひてーきそひて【井】
- 55 56 (歌順逆)【井】
- 59 廿八ー廿□【井】
- 60 わりなしーをりなし【井】
- 62 同当座ー*【抄】下ーかけ【井】
- 67 五月廿日、左京兆月次会にー*【抄】
- 68 桜雨ー梅雨【井】【抄】
- 69 つみーつぬ【井】もときー【井】
- 70 音にもあけほのゝ空ー音にも【抄】あけほの空
- 74 何わさかー何にさか【井】よとめんー【抄】よとめん
- 77 うらみーうらみも【井】
- 80 六月ー六月【井】はかりー【抄】はかり
- 82 待ー行【井】
- 83 みたるなりーみ【抄】たるなり
- 85 問とはぬーおとつれぬ【井】庵ー庭【井】
- 86 しくー玉しく【井】
- 92 細引ー綱引【井】細引ー綱引【井】
- 94 いく秋ー秋【井】
- 95 をしねもるーをし【抄】かなく【井】
- 96 同会、大夫代にー大夫代に【井】七夕風ー夕七夕風【井】
- 97 陰高きー高き【井】
- 98 同十一日、吉見源六法薬とて三十首歌勸侍しに、卷頭を□十一日、吉見源

- 99 大夫殿月次会ー大夫殿会【井】に猶ーにも猶【井】にも猶【抄】
- そへてーそ【井】
- 104 忘るゝー忘れは【井】
- 106 むらさきのーむ【抄】さし【井】
- 115 くまーかけくま【抄】
- 118 うつらんーかくらん【井】
- 125 たのしむーたゆしむ【抄】陰そひてーかひありて【抄】身ー身も【井】【抄】
- ※4 126 129ー*未収歌【井】
- ※5 于時元禄七戌五月十八日／於洛陽令懇望写之者也ー雅ー卿御集有虫損之間
 威【井】此一巻不覺後之写畢／于時文政三年庚辰十二月十五日【抄】
- 〔付記〕
- 資料の翻刻について、許可を賜った祐徳稻荷神社に心より御礼申し上げます。なお、本稿は平成二六年度 JSES 科学研究費助成事業（研究活動スタート支援、課題番号 25884049）による研究成果の一部である。
- (ひだか あいこ・佐賀大学講師)
- (そのだ かつとし・福岡大学大学院博士後期課程)